書評

伊地知鉄男 著

連歌の世界

「日本歴史叢書15」

岡本彦一

「日本歴史叢書15」として、本書が出たのは何かそぐわない感じがした。しかし、この叢書、「印章」13、「日本の紙」14と出ているところを見るとなるほどとも思われた。なお、この叢書の刊行予定書目には文芸、芸術関係のものもいろいろとある。そこで、そういう広い場において見ると、案外これでしっくりゆくようでもある。何だか、日本歴史叢書の編集批評をやっているようでおかしいが、何しろこれが、わたしの感じた第一印象であったのだから仕方がない。それはそれとして、立派な本が出て、この道にいささかのかかわりあいをもつ者として、本当によろこばしい。というのは、著者も序文で述べていられるが、この種の本は福井久蔵著「連歌の史的研究」（昭5—6）、おなじく「連歌の道」（昭16）、山田孝雄著「連歌概説」（昭12）、おなじく「連歌及連歌史」（岩波講座日本文学）（昭7）があるだけ。そしてこれらの本は、しかるべき図書館にはあっても、坊間これを購入しようにも稀れな本となって見かけることもなく、かりにあったとしても貧書生には高価で手が出ない。学生諸君に参考にしなさいといっても無理な実情にあった。ちょっとここで横道にそれると、連歌の本はどうしてこうも入手し難いのであろうか。最も手軽に買えそうな岩波文庫でさえ、この連歌ではこまるのである。それはこの著者の編になる「連歌論集」上下で、未刊の学書を翻刻され、連歌研究には必携の書と思われるが、岩波では品切れと称して、書店では見かけることができなくなってしまっている。そこでいま入手しやすい連歌の基本的な書物というと、日本古典文学大系の伊地知鉄男校注「連歌集」、木藤才蔵校注「連歌論集」ぐらいのものである。こういうときに、本書が出たことはまことにありがたいのである。

本書はその構成からいって、山田氏の「連歌及び連歌史」をつぐものと思える。つまりはじめに連歌の何であるかを概説し、つぎにその歴史をのべるというやり方である。本書では「第一連歌文芸」、「第二連歌の歴史」の二部に分かれるのだが、この第一が簡略であったのは残念である。著者も序文で「叢書の関係上、その解説さえできるかぎり省略しなければならないものになった」と述べていられる。この「叢書の関係上」というのは何のことだかわからぬが、もしそれが頁数のことでなくて、日本歴史にあるとすると、これが文学だったらと思われるのである。それはさておき、本書の構成を頁数でみると、「第一連歌文芸」75頁、「第二連歌の歴史」349頁、年表・書目・

索引29頁となる。なお山田氏の「連歌及び連歌史」の割りふりは、緒言・結論をのぞくと、「連歌の解説」22頁、「連歌の略史」99頁であつて、その比率は本書とほぼ同じということになる。山田氏のは「岩波講座日本文学」であつたが。再び閑話休題。

本書の「第一連歌文芸」における連歌の概説は簡である。しかし、要は得ている。更にくわしく知りたい人はこれを基礎として勉強するという手順である。序文にも著者は連歌が何か「わかる手立さえもわからないらしい」といい、「しかしまたその壁を自分で打ち破ろうとする意欲のない今日的な安易な態度にも疑問がある」とする。再びいうが、説明は簡にして要を得ているのである。簡といつてもおさえるところはおさえてある。まず「春夏すぎて秋にこそなれ」に何をつけるかの説明から始まり、短連歌と長連歌、百韻懐紙の名処と書式、賦物、式目についてのべ、連歌の神や功徳の話に転じ、連歌張行の実際、発句・脇・第三以下の詠みように終つている。そして、その叙述は極めて厳密である。あやふやなことは何も書いてない。書いてあることは皆信頼できる。引用文はすべて出典が、百韻千句の類はその所在が明示されている。「わかる手立」は十分に示されていると見てよい。思うに著者の最も得意とされるところは書誌的考察であり、確実な文献に立脚した発言であろう。本書では、すみずみまで、この特色がゆきわたつている。著者の発言には、その裏にぼう大な資料の裏付けがあるわけだ。従つて本書をよんでいてわたしが最もうれしく感ずるのは、わからないと書いてあるところである。著者に不明であるといつてもらうほど安心できることはないからだ。

次に「第二連歌の歴史」に移ろう。まず、その構成からみると、「1連歌発生の基盤」から始まり、「2十一、二世紀の一句連歌の性格」では一句連歌から鎖連歌への展開を、「3十三世紀前半の鎖連歌」では新古今時代の堂上連歌を、「4十三世紀後半の連歌」では堂上連歌・地下連歌、式目制定を、「5十四世紀前半の地下連歌」では善阿を主とし、順覚・信昭・良阿を、「6十四世紀後半の連歌」では二条良基を中心に救済、周阿、梵灯を、「7十五世紀前半の連歌界」では地下の連歌師層、宗砌、心敬を、「8十五世紀後半の連歌」では宗祇を扱い、「9結び」では宗祇までの叙述を要約し、さらに宗祇以後の展望を与えている。構成は以上である。

この連歌史、宗祇で叙述が終つていることについては、序文に「とくにある意図や意味があつてのことではないが」としていられるが、やはりここに著者の連歌史についての考えが出ているようである。それは宗砌・心敬の時代に連歌の文芸性は確立され、宗祇・兼載の時代はその延長線上にあり、宗祇の弟子たちの時代になると連歌は階層的な広がりは持つものの、固定化し、下降線をたどる。連歌の文芸史的意義はその最高潮の時代までを叙するにあると考えられたものであろう。従つてその次は俳諧興隆の過程として捉えることに意義を認められるのではなかろうか。

さて、これから各項を読んで感じたところを述べようと思うのだが、それまでに、

またいささか横道に入ろう。そもそも評論をすることは、つまるところ自己を語ることになる。それも、小林秀雄の批評文学のように高い程度のそれではなくて、ここで、わたしが本書について語るということは、わたしの無学と無見識を暴露するという低い程度においてのそれなのであるが。ではそんな恥かしい、得にもならぬことを何故あえてするか。それは、本を読んで得た学恩に対し感謝の気持ちをあらわしたいからである。従つて以下述べることも、対等乃至は高い立場に立つて裁断するのではさらさらない。そういう実力の持ち合わせがないからである。このことをあらかじめことわつておかねばならぬと思う。

「1連歌発生の基盤」、これは「和歌に関連して」という副題がついている。かつてわたしは「連歌付合の意識」という一文を草したことがあつた。そのときわたしが問題と感じていたことは連歌付合における和歌的発想であつた。つまり上句から下句へよみつづけて和歌とするのか、になるのか、というように感じられるのか、あるいはそれが本質か、一つの技巧かということであつた。この点、本書は発生において特に和歌に関連して説かれたことは当然とはいえ、本書の終りまで連歌と和歌との関連のうえに把握し、連歌と和歌とのちがいを、一貫して連歌における上句、下句の対立関係に認めていられるのはまことに適切であつた。

「2十一、二世紀の一句連歌の性格」には「一句連歌から鎖連歌へ」という副題がついている。この2の項は本書のなかでも力作であると思う。一句連歌の性格のあらゆる要素をさぐり、連歌が文芸性をもつに至つたことを時間的に即座につける即興性から、時間の制約を無視して技巧的な面が重視され、そこに文芸性がはぐくまれてくる過程を説き、さらに二人唱和という連歌の根本原則から独吟、三吟が派生して来る次第を見、それも和歌の上句下句の付合でなく、種々な連接があつた変則的な例をさぐり、ついで和歌の三人贈答、四首一連の贈答歌のなかに連歌の客・主・相伴の付合、主題展開の原型を認められた。つづいて一句連歌のなかの寄合、物名から賦物が生成してくる順が説かれる。こうした叙述に著者はつねに、史的展開の相で捉えることに留意し、いくつかの関連のなさそうな、また次々と現われてくる事実は、著者の手にかかるとみごとに史的展開における必然的な位置を与えられるのであつた。

「3十三世紀前半の鎖連歌」においては、新古今と連歌との関係を考察し、新古今の三句切れ、体言止めなどの技巧が連歌の発想、修辞の影響のもとに生れたことを述べられた段をおもしろく読んだ。また、当時の堂上連歌がはなはだ和歌的性格を帯びたものであつたこと、すなわち一句としての独立性のないものが特に長句に多く、つまり短句と合して一首の和歌となるような表現をとることが多いこと、の叙述もおもしろく読んだ。というのはこの和歌的性格は連歌には多かれ少なかれ最後までつづくのであつて、この意味での連歌と和歌との関係は連歌の本質の一部をかたちづくるものと理解し、歴史的に消長してゆく過程を把握するより説明の仕方のないものであると

思われるからである。

「4十三世紀後半の連歌」は、堂上連歌の風体として為氏、為世を、地下連歌の風体として道生、寂忍らの作を解釈鑑賞して説いてあるが、この項では式目制定の史的叙述にわたしは興味があつた。

「5十四世紀前半の地下連歌」、ここでは善阿、順覚、信昭、良阿について、具体的に作品を解釈、鑑賞することによつて、それぞれの史的位置を示している。なお、善阿の叙述と順覚・信昭・良阿三人の叙述とは、ほぼ等量の頁数がさかれている。

このへんで各項に割りあてられた頁数を見ると、1は7頁であり、2については44頁を費しているが、3は27頁、4は28頁、5は16頁である。6は56頁、7は82頁、8は78頁である。6は救済、良基、周阿、梵灯の叙述であるが、そのうち救済は14頁、良基は連歌歴、連歌観、風体と細分されて22頁、7の宗砌は生涯と著述、風体と細分されて33頁、心敬は生涯と著述、古人批判、仏道歌道一如観、作風と細分されて39頁、8の宗祇は生涯、百韻・千句等、古典の理解と鑑賞、連歌観、作風と細分されている。なお宗祇は作品目録・解題が33頁に及んでおり、宗砌、心敬については生涯の叙述が作品目録・解説と重なつている。そういうことを考えのなかに入れてみても、この頁数の割り宛ては連歌の史的叙述における、著者の評価のあらわれであるとみてよい。こういうがつちりした構成をみると、百韻連歌における作者の句数が思いあわされる。句数の多寡は一座の連衆の連歌的実力評価がそのまま数字になつているわけだから。とにかくみごとな頁数の割りふりである。書いていくうちに自然とこうなつたというものではあるまい。

これからあと、すなわち6・7・8が著者の力をそそがれた所であろうと思うが、わたしの方は、逆にはし折つて進むことになる。

さきにも述べたことであるが、作品の解釈と鑑賞によつて説得してゆく方法は実に力強い、これまでこの種の史的叙述には、例句として引用されてはいても説明がないので、読者の方ではあるいは理解が行きとどかなかつたり、あるいは間違つた理解をして、そのまますませていたこともあつたであろう。ところが、本書では実に正確に解釈し、鑑賞されている。著者にはすでに日本古典文学大系の「連歌集」という業績がある。書誌的操作もざることながら、正確な解釈がなくては何も語ることができないはず。しかも、連歌の解釈ほど恣意の入る余地が多くて、困難なものはない。しかし、著者の解釈と鑑賞には信をおこさざるを得ない。それはまず著者が連歌を広く眺めわたしていること、自注、古注のあるものはそれを大切にされていること、著者には練りあげられたするどい直観力があることなどの条件が揃つているからであろう。さりながら、卒爾に読んだうちで疑問にもならぬような一、二にぶつかつたのでここに記しておこう。

204頁の「ありしよの契いかにとたどられて」の「ありしよの契」は「今は思い出のみに生きるかつての二人の逢瀬」としていられるが、日本古典文学大系の「連歌集」では「彼の人の生前、二人の逢瀬に」

とあつてこの方は明確である。しかし、日本古典全書の福井久蔵校注「莵玖波集」には「前夜契りかはした」とあり、また「ありし世」とある藤井本・学習院本によると、「前世の因縁如何とたどられる」とも書いてある。この「前世における因縁」の方がよりふさわしくはないかと思うのであるが、どうだろう。

もう一つ、これはわたしの単なる臆説にすぎぬが、223頁の「親子の契いかゞ結びし」に対する「夕顔の葉末の露の玉かづら」の付合において、「契りを再会とみて、源氏と夕顔の子玉鬘との再会を連想しての付合である」とあるし、日本古典文学大系「連歌集」には「再会とか確認とかの」とある。しかし、この、親子の契の「いかが結びし」は源氏と玉鬘との親子の間柄でもない、恋人同志でもない状況をいつたものではなかろうか。生きてくると思うが。

すでに、さきにも記したが、著者は何を書いていても史的展開ということを心にとりもち、これを離さない。その苦心のあらわれの一つは宗祇の作品の位置についての叙述である。著者は宗祇以前の連歌到達点を、地下連歌の正統をつぎ、修辞的技巧、付合・連想における機知、執成しの巧緻さに特色をもつ宗砌流と正徹の流れをくみ、前句と付句とを情趣的に統一しようとした心敬流との二つに認めた。そして、宗祇は宗砌流を、兼載は心敬流をついだと述べ、また一方では宗祇の生得の才能は宗砌流であつたが、古典のもつ風雅の深究の結果その精神を学んだとして宗砌流に心敬流を統合したようにも説いている。いささか矛盾めいてはいるが、実はそうではなくて、宗祇の古典研究の努力を高く評価するなら、生得の宗砌流の才能にどこまで心敬流の修行稽古を持ちこんだかは連歌の歴史として最も興味深い場合の一つであろう。従つてこうした叙述になつたものと思われる。

さて、本書の叙述をささえた三本の柱として以下の条件を挙げたい。すでに述べたところであるが、豊富な資料による書誌的な裏付け、実作に対する透徹した文芸的理解、そして、次々現われてくる諸要因の歴史的展開の相の下における整理である。

最後にミスプリント。227頁堀部正三―二、252頁信水―永。292頁仏籍祖室は仏籬祖室か。なお、316頁「東常縁に『道の零落よ』と評された若いころの心敬」は、表現としては行きすぎで、323頁「『東野州聞書』に道の零落よと嘆かしめた心敬生得の」の方がおだやかではなかろうか。東野州がいつたのではなく、正徹の言の聞き書きなのであるから。

見当はずれのことを、くだくだしく書いたかも知れない。妄言多謝。

（昭和四十二年八月一日刊　四六三頁　吉川弘文館　九六〇円）